

建築研究所の国際地震工学研修(津波防災コース)で仙台平野の津波堆積物の現地視察を実施(2011/7/11)

7月11日、建築研究所の国際地震工学研修(津波防災コース)として、インドネシア・マレーシア・ペルーから5名の研修生が当センターを訪れました。この研修は、建築研究所が国際協力の一環としてとして、世界の地震発生地帯にある開発途上国の研究者及び技術者を対象に行われているもので、午前中に今村文彦教授の講義を受講し、午後には政策研究大学院大学と国際協力機構(JICA)からの同行者の方々と一緒に、仙台市若林区内で3月11日の津波による被害と堆積した土砂の状況を当センターの菅原研究員の引率のもと視察しました。荒浜地区では、家屋や施設の被害状況を確認するとともに、防潮堤などの海岸構造物や津波情報伝達システムが地震・津波の際に機能したかどうかについて質問が寄せられました。また、仙台東部道路東側の水田内で、869年の貞観津波による堆積物の試掘を行い、過去の津波の痕跡がどのような形で地層中に残されているかを観察しました。この際、仙台平野での過去1100年間の地形の変化や堆積物の特徴、津波堆積物の識別・分析の手法について解説を行いました。



インドネシア、マレーシア、ペルーからの行政技術職員や研究者などが研修を受けました。



深沼海水浴場の被害状況を視察する参加者。震災から丁度4カ月のこの日、他にも多くの方々が現地を訪れていました。



仙台東部道路付近の水田内で、今回の津波の堆積物と貞観津波の堆積物を観察しました。



現地視察の最後には、研修生自身にも試掘を体験して頂きました。